

# 國學院大學學術情報リポジトリ

王應麟『困學紀聞』小考：『易經』を端緒にして

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齋藤, 成治 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001462">https://doi.org/10.57529/00001462</a>

# 王應麟『困學紀聞』小考

## ―『易經』を端緒にして―

齋藤成治

### 論文要旨

王應麟は南宋末より元初にかけての学者であり、朱子学者の一人とされる。その著作の一つに、『困學紀聞』がある。『困學紀聞』は『四庫全書総目提要』によると、「劄記考証」と呼称され、高く評価される。

南宋の学問といえば、朱子学が中心であり、それによって「四書」が重要視されたことは言うまでもない。しかし、「五經」もまた中国の学問において揺るぎない地位を占める。朱子「四書」は高価値を与えられたが、「五經」は蔑ろにされたわけで

はない。

「五經」のなかでも、本稿ではまず『易經』に焦点をあてた。『易經』に対して王應麟は如何なる言及及び解釈を行ったのか。また、朱子と『易經』といえは『周易本義』があり、王應麟は『周易本義』に如何なる言及及び解釈を行ったのか。本稿ではこの問題を明らかにすることを目的とする。

キーワード

王應麟 南宋 朱子学 困學紀聞 易經

### 一、はじめに

清の学者、何焯は『困學紀聞』の卷一「易」の末に次のように述べる。

謁曹侍郎秋岳先生於集福精舍、先生教之曰、「宋説家之書、莫如洪容齋・王伯厚爲優。然『困學紀聞』條理尤爲秩然、不可以不亟讀也。」(中略) 沾溉之益、良非一二可竟、南北奔走、亦未嘗不借也。(省略)

曹侍郎秋岳先生に集福精舎に謁す、先生之に教へて曰はく、「宋の説家の書、洪容齋・王伯厚の優爲るに如くは莫し。然るに『困學紀聞』の條理は尤も秩然爲り、以て亟かに讀まざるべからざるなり」と。(中略) 沾溉の益、良に一二の竟すべきにあらず、南  
北奔走して、亦未だ嘗て偕にせずんばあらざるなり。(下略)

このように高く評価をされているにも関わらず、『困學紀聞』に関する研究は管見の限り少ない<sup>三</sup>。それは、南宋の学問の関心の多くが朱子学における「性」や「理」に関わる論考で、その視点は朱子学の形成と展開が中心であったからであろう。しかし、この議論の他にも、後に清代において高評価された学術も存在していた。そのため、南宋における学問の様相を考察する場合、典型の一つとして、王應麟(一一二二—一二九六)を採り上げることが意味なしとしない。

清代に編纂された『四庫全書総目提要』(以下、『提要』と略称)においても『困學紀聞』は高く評価されている。『提要』にいう「劄記考証」と呼ばれる著作が南宋においてどのような議論の展開があるか。そしてそれはどのような価値を有するのか、いささかの考察を試みたい。これは朱子学の同時代における形成及び進展を検討するうえで、重要であろう。

南宋の学問といえば、ひとまず朱子学が形勢され、その議論の浸透によって「四書」が重要視されつつあったとみられる。しかし、それでも「五經」は中国の学問において揺るぎない地位を占めている。朱子によって高い価値を与えられた「四書」当然「五經」を基礎にするものと言え、加えて「四書」が優先されたからといって「五經」が蔑ろにされるといふことでもない。

「五經」のなかでも、本稿ではまず『易經』に焦点をあてることにした。『易經』に対して王應麟は如何なる言及び及び解釈を行ったのか。この問題を明らかにすることを目的とする。朱子と『易經』といえは『周易本義』がある。王應麟は『易經』及び『周易本義』に如何なる言及び及び解釈を行ったのか。本稿ではこの問題を明らかにすることを目的とする。

底本は、『王應麟著作集成 困學紀聞注』(翁元圻等注・孫通海點校・中華書局・二〇一六年発行。)を用いる。その中には清の閻若璩・翁元圻注等が収められており、随時参考とした。また、「」は王應麟の自注である。

王應麟と『困學紀聞』については、既に別の稿にて纏めているので、そちらを参照してほしい。<sup>四</sup>

まず、やや長くなるが、『困學紀聞』の『提要』の記事を引用する。それによって、『困學紀聞』の解題と歴史的評価を確認する。

『困學紀聞』二十卷、宋王應麟撰。應麟有『周易鄭康成注』。已著録。是編乃其劄記考証之文。凡說經八卷、天道・地理・諸子二卷、考史六卷、評詩文三卷、雜識一卷。卷首有自敘云、「幼承義方晚遇難屯、炳燭之明、用志不分云云。」蓋亦成於入元之後也。應麟博洽多聞、在宋代罕其倫比。雖淵源出於朱子、然書中辨正朱子語誤數條。如『論語』注「不舍晝夜」舍字之音、『孟子』注「曹交曹君之弟」、及謂『大戴禮』爲鄭康成注之類、皆考證是非、不相阿附。(中略)蓋學問既深、意氣自平、能知漢唐諸儒、本本原原、具有根底、未可妄詆以空言。又能知洛閩諸儒亦非全無心得、未可概視爲舛陋。故能兼收並取、絕無黨同伐異之私。所考率切實可據。良有由也。(中略)考應麟博極羣書、著述至六百餘卷。(省略)

『困學紀聞』二十卷、宋の王應麟の撰。應麟に『周易鄭康成注』有り。已に著録す。是の編乃ち其の劄記考証の文なり。凡そ說經八卷、天道・地理・諸子二卷、考史六卷、評詩文三卷、雜識一卷なり。卷首に自敘有りて云ふ、「幼にして義方を承け晩に難屯に遇ふ、炳燭の明、志を用ふること分たず云云」と。蓋し亦元に入るの後に成る。應麟博洽多聞にして、宋代に在りては其の倫比罕なり。淵源は朱子に出づと雖も、然れども書中に朱子の語の誤り數條を辨正す。『論語』の注の「晝夜舍かず」の舍の字の音、『孟子』の注の「曹交は曹君の弟」、及び『大戴禮』を謂ひて鄭康成注と爲すが如きの類は、皆是非を考證し、相阿附せず。(中略)蓋し學問既に深く、意氣自ら平らかにして、能く漢唐諸儒の、本を本とし原を原とし、具さに根底有りて、未だ妄りに詆るに空言を以てすべからざるを知る。又能く洛閩の諸儒の亦全くは心得無きにあらず、未だ概視して舛陋と爲すべからざるを知る。故に能く兼ね取め並び取りて、絶えて黨同伐異の私無し。考ふる所は率むね切實にして據るべし。良に由有るなり。(中略)考ふるに應麟博く羣書を極め、著述は六百餘卷に至る。(下略)

本稿に関連する箇所を要約すると、『困學紀聞』が完成したのは元に入ってからであり、その内容は広範囲である。また、宋代にあつては王應麟の博識さに並ぶ者は稀である。学問の淵源は朱子によるが、書中で朱子の誤りを正す箇所がある。王應麟は当時の学問とは異なり、漢代や唐代の学問に近く、妄りに根拠のない発言はしない、となる。

『提要』のいう「所考率切實可據、良有由也」こそ、『困學紀聞』と王應麟の特徴を簡潔に述べた箇所であり、これが清代以降の評価されたものであろう。また、『提要』でも版本について述べられるが、これは閻若璩の注釈が刊本に収められたことを述べる。王應麟

の著作は多く、その学問の範囲は広大である。しかし、これらの著書に対する個別研究、そして王應麟全体の研究は管見の及ぶ限り、殆んど存在しない。そこで、本稿では、南宋における学問の様相を考察するために、王應麟の『困學紀聞』を取り上げることとした。

また、『提要』に「應麟有『周易鄭康成注』。已著録。」とあり、『易經』の鄭玄注についての著作がある。しかし、本稿では『困學紀聞』に範囲を限定するため、ここでは論じない。

## 二、『易經』本文に関して

『困學紀聞』巻一「易」の始めの十箇条は「乾」「坤」「繫辭上下傳」を中心に述べる。これは『易經』の総論を述べるためであろう。まず、その十条のうちの数条を次に示す。

①「修辭立其誠。」修其内則爲誠、修其外則爲巧言。『易』以辭爲重、上繫終於「黙而成之」。養其誠也。下繫終於「六辭」。驗其誠不誠也。辭非止言語、今之「文」古所謂「辭」也。

①「辭を修めて其の誠を立つ。」其の内を修むれば則ち誠と爲し、其の外を修むれば則ち巧言と爲す。『易』は辭を以て重しと爲す、上繫は「黙して之を成す」に終はる。其の誠を養ふなり。下繫は「六辭」に終ふ。其の誠不誠を驗するなり。辭は言語に止まるに非ず、今の「文」は古の所謂「辭」なり。

「修辭立其誠」は「文言」の句である。続いて王應麟は「文言」の句の解説をする。ただし、王應麟の解説は独自のものではない。『東萊易說』に「辭之所發、貴乎誠敬、修於外而不信於内、此乃巧言令色。（辭の發する所は誠敬を貴ぶ、外を修めて内に信あざれば、此れ乃ち巧言令色なり。）」とある。このことから、王應麟はこれを踏まえて解説をしたものと考えられよう。

②「潜龍以不見成徳」、管寧所以箴邴原也。「全身以待時」、杜襲所以戒繁欽也。『易』曰、「括囊无咎无譽。」

②「潜龍は見ざるを以て徳と成す」、管寧の邴原を箴しむる所以なり。「身を全くして以て時を待つ」、杜襲の繁欽を戒むる所以なり。

『易』に曰はく、「括囊して咎无く譽無し」と。

「潜龍以不見成德」とは『三国志』の「管寧傳」裴松之注に見られる。<sup>五</sup>また、「全身以待時」は『三国志』「杜襲傳」の一場面を示す。<sup>六</sup>そして「括囊无咎无譽。」は『易經』「坤」卦六四爻辭に見られる。「括囊」とは袋の口を縛るという意味だが、転じて口を閉じて発言しないという意味になる。この「括囊」の具体例として、王應麟は『三国志』の二人の列伝の一部を示した。抽象性をもつ『易經』の一句を解説するために、具体性を持つ『三国志』の列伝を用いたと考えられよう。

③「貞者、元之本」周公曰、「冬日之閉凍也不固、則春夏之長草木也不茂。」（見『韓非』「解老」。）可以發明貞固之說。

③「貞は、元の本なり」周公曰はく、「冬日の閉凍するや固からざれば、則ち春夏の草木を長ずるや茂せず」と。『韓非』「解老」に見ゆ。以て貞固の説を發明すべし。

この条では周公の一節を用いて、「貞固之説」を説明する。周公の一節は『韓非子』「解老」に、「周公曰、「冬日之閉凍也不固、則春夏之長草木也不茂。」天地不能常修常費、而況於人乎。故萬物必有盛衰、萬事必有弛張、國家必有文武、官治必有賞罰。（周公曰はく、「冬日の閉凍するや固からざれば、則ち春夏の草木を長ずるや茂せず」と。天地は常修常費する能はず、而るを況んや人に於てをや。故に萬物必ず盛衰有り、萬事必ず弛張有り、國家必ず文武有り、官治必ず賞罰有り。）」とある。また、「貞固之説」の説とは、『易經』「文言」に、「元」者、善之長也。「亨」者、嘉之會也。「利」者、義之和也。「貞」者、事之幹也。君子體仁足以長人、嘉會足以合禮、利物足以和義、貞固足以幹事。君子行此四德者、故曰「乾、元・亨・利・貞。」（「元」とは、善の長ずるなり。「亨」とは、嘉の會するなり。「利」とは、義の和するなり。「貞」とは、事の幹なり。君子は仁を體して以て人を長ずるに足り、嘉の會して以て禮を合するに足り、物を利して以て義を和するに足り、貞の固くして以て事を幹とするに足る。君子は此の四徳を行ふ者なり、故に曰はく「乾、元・亨・利・貞」と。）とある。『韓非子』の周公の一節を用いることで、「貞固之説」が明確になると、王應麟は述べる。

④坤之六五、程子以爲「羿・莽・媧・武非常之變。」干寶之説曰、「柔居尊位、若成・昭之主、周・霍之臣也。百官總己、專斷萬幾、雖情體信順、而貌近僭疑。言必忠信、行必篤敬、然後可以取信於神明、无尤於四海。」愚謂此説爲長。

④坤の六五は、程子以爲へらく「羿・莽・媧・武は非常の變なり」と。干寶の説に曰はく、「柔は尊位に居り、成・昭の主となりて、周・霍の臣の若きなり。百官己を總べて、萬機を專斷し、情は信順を體すと雖も、而れども貌は僭疑に近し。言は必ず忠信たり、

行は必ず篤敬にして、然る後に以て信を神明に取り、四海に尤无かるべし」と。愚謂へらく此の説長爲りと。

この「程子以爲」は程伊川の『伊川易傳』に見られる。また、「干寶之説」は唐の李鼎祚『周易集解』に見られる。<sup>七</sup>この条は「坤」の「六五」の爻辭に「黃裳、元吉（黃の裳、元なり吉なり）」とあり、その象傳に「黃裳元吉、文在中也。（黃裳元吉とは、文中に在るなり）」とある。この爻辭に程伊川は「陰者、臣道也、婦道也、臣居尊位、羿・莽是也。猶可言也。婦居尊位、女媧氏・武氏是也。非常之變、不可言也。（陰は、臣の道なり、婦の道なり、臣の尊位に居るは、羿・莽是れなり。猶ほ言ふべきなり。婦の尊位に居るは、女媧氏・武氏是れなり。非常の變なり、言ふべからざるなり）」とある。程伊川は干寶の説と異なつた説を展開したが、王應麟は程伊川の説ではなく、干寶の説を支持したと考えられる。朱子学大成の一翼を担つたと言ひ得る程伊川の学問であつても、王應麟は偏見を持たなかつたと言えよう。

さて、ここまでで「乾」・「坤」・「繫辭上下」による『易經』総論の言及を確認した。さらに、次の条にはこのようにある。

⑤ 乾・坤之次、屯曰、「建侯」、封建與天地並立。一旅復夏、共和存周、封建之效也。匹夫亡秦、五胡覆晉、郡縣之失也。

⑤ 乾・坤の次、屯に曰はく、「侯を建つ」と、封建は天地と並び立つ。一旅は夏に復し、共和は周に存す、封建の效なり。匹夫は秦を亡ぼし、五胡は晉を覆す、郡縣の失なり。

「建侯」は「屯」卦に見られる。『易經』総論の後、個別の卦に議論を移したと考えられる。この条の始まりにも「乾・坤之次」とあるため、④までで区切りをつけたと考えられる。

ではここから、『易經』の他の卦についての言及を確認する。

⑥ 古者君臣之際、分嚴而情通。「上天下澤、履」、其分嚴也。「山上有澤、咸」、其情通也。不嚴則爲未濟之三陽失位、不通則爲否之天下無邦。

⑥ 古者君臣の際、分は嚴にして情は通ず。「上天下澤は、履なり」、其の分は嚴なり。「山上に澤有り、咸なり」、其の情は通ずるなり。嚴ならざれば則ち未濟の三陽位を失ふと爲す、通ぜざれば則ち否の天下無邦無しと爲す。

「上天下澤、履」は「履」卦象傳の句、「山上有澤、咸」は「咸」卦象傳の句である。「其分嚴也」とは、「履」卦の象傳の「君子以辨

上下、安民志（君子は以て上下を辨じ、民志を安んず）を指し、「其情通也」とは、「咸」卦の象傳の「君子以虚受人（君子は以て人を虚受す）」を指すと考えられる。君主と臣下の身分の違いを嚴格化することで、「未濟」の卦のように位を失い、「否」の卦のように国そのものを失うことを回避できる、という。この条は『易經』の卦辭や象傳を用いて卦同士の関係を王應麟が説明していると考えられる。

⑦ 信君子者治之原。隨之九五曰、「孚于嘉、吉。」信小人者亂之機。兌之九五曰、「孚于剝、有厲。」

⑦ 君子を信ずるは治の原なり。隨の九五に曰はく、「嘉に孚あり、吉なり」と。小人を信ずるは亂の機なり。兌の九五に曰はく、「剝に孚あり、厲有り」と。

この条は「隨」卦九五爻辭の句と「兌」卦九五爻辭の句をそれぞれ説明する。『易經』の言葉は短く綴られるものが多いため、その解釈が重要となる。前半では「信君子」と解し、後半では「信小人」と解する。「信君子」をすることで「孚于嘉」となり、「信小人」であれば、「孚于剝」となるのである。このように、短い『易經』の一節を王應麟は端的にかつ分かりやすくなるよう述べたのであろう。

⑧ 小畜上九、「月幾望」、則凶。陰亢陽也。歸妹六五、「月幾望」、則吉。陰應陽也。中孚六四、「月幾望」、則无咎、陰從陽也。曰「幾」者、戒其將盈、陰盈則陽消矣。

⑧ 小畜の上九に、「月の幾んど望なる」は、則ち凶なり。陰陽に亢すればなり。歸妹の六五に、「月の幾んど望なる」は、則ち吉なり。陰陽に應ずればなり。中孚の六四に、「月の幾んど望なる」は、則ち咎無し、陰の陽に従へばなり。「幾」と曰ふ者は、其の將に盈たんとするを戒め、陰の盈つれば則ち陽の消ゆるなり。

この条では「月幾望」という一句について解説する条である。「月幾望」は「小畜」卦上九爻辭、「歸妹」卦六五爻辭、「中孚」卦六四爻辭の三ヶ所に見られる。この三つの中の「月幾望」は意味はそれぞれ違う。「小畜」では「凶」とされ、その理由を「陰亢陽也」と説く。反対に「歸妹」では「吉」とされ、「陰應陽也」と説く。「中孚」では「无咎」とし、「陰從陽也」と説く。王應麟が言うには、「幾」とは、今にも満ちようとする瞬間であり、その時こそ注意すべきである、陰の気が充滿することは、陽の気が消えることなのだ、と説明する。卦のもとの内容に合わせて「月幾望」という一句は意味が変化する。その事実を王應麟は端的に示して見せた。「月が満



ちようとすると「という現象は不易の事実であっても、その現象をどう捉えるかによって意義は変易する。これを王應麟はこの条で解説したと考えられる。

⑨『易』於蠱「終則有始」、於剝「消息盈虛」、於復「反復其道」、皆曰「天行也」。然則無與於人事歟。曰、聖人以天自處、扶陽抑陰、盡人事以回天運、而天在我矣。

⑨『易』に蠱に於ては「終れば則ち始有り」、剝に於ては「消息盈虚」と、復に於ては「反復其れ道あり」と、皆曰はく「天行なり」と。然らば則ち人事に與かること無からんか。曰はく、「聖人は天を以て自ら處り、陽を扶けて陰を抑へ、人事を盡して以て天運を回らす、而して天は我に在り」と。

「蠱」卦象傳に「終則有始」と、「剝」卦象傳に「消息盈虚」と、「復」卦象傳に「反復其道」とある。そして各々の象傳に「天行也」とある。卦は別であるが、共通して「天行也」とある。王應麟は六十四ある卦の中から「天行也」とある卦は三つだと示し、その説明をした。この「天の運行である」について王應麟は自分でやるべきことを十分果たしたうえで天に任せる、と説明する。この条も『易經』の卦の解説をしている条と言えよう。

ここまでで、「乾」・「坤」及びその他の卦についての確認をした。『易經』における「乾」・「坤」は重要な位置を占める事実は疑いようがない。それら二者に対して、王應麟は始めに言及した。また、中には解説するような条も見られた。「乾」・「坤」を重視して言及することは、『易經』そのものについて言及することに繋がるのではないか。「乾」・「坤」以外の卦についても解釈をする条がほとんどである。『易經』の卦辭も爻辭も短く綴られる。これら一節をどう捉えるか、そして異なる卦に見られる同じ一句をどう捉えるか。王應麟はそこに注目していたと考えられる。

### 三、宋代以前の注釈に関して

次に、『易經』の注釈、なかでも、漢唐の注釈に対して、王應麟がどのような言及をしているかを確認する。『易經』の注釈として、

現在でも流布している中に、三国魏の王弼注がある。唐代には孔穎達撰の『周易正義』がある。また、鄭玄注もまた『提要』にあるように、王應麟の手によって『周易鄭康成注』が著作として残っている。しかし、前述のとおり、ここでは論じない。

⑩鄭康成『詩箋』多改字、其注易亦然。如「包蒙」、謂「包」當作「彪」、「文也」。泰「包荒」、謂「荒」讀爲「康」、「虚也」。大畜「豮豕之牙」、謂「牙」讀爲「互」。大過「枯楊生莢」謂「枯」音「姑」、「无姑、山榆」。晉「錫馬蕃庶」、讀爲「藩遮」、謂「藩遮、禽也」。解「百果草木皆甲宅」、「皆」讀如「解」、「解謂坼、呼皮曰甲、根曰宅」。困「剝削」當爲「倪仇」。萃「一握爲笑」、「一握」讀爲「夫三爲屋」之「屋」。繫辭「道濟天下」、「道」當作「導」。「言天下之至賾」、「賾」當爲「動」。說卦「爲乾卦」、「乾」當爲「幹」。其說多鑿。鄭學今亡傳、『釋文』及『正義』間見之。

⑩鄭康成の『詩箋』多く字を改む、其の易に注するも亦然り。「包蒙」の如きは、「包」の當に「彪」に作るべし、「文なり」と謂ふ。泰に「包荒」、「荒」は讀みて「康」と爲す、「虚なり」と謂ふ。大畜に「豮豕の牙」、「牙」は讀みて「互」と爲すと謂ふ。大過に「枯楊莢を生ず」、「枯」音は「姑」と謂ふ、「无姑、山の榆」と。晉に「馬を錫はること蕃庶たり」、讀みて「藩遮」と爲す、「藩遮は、禽なり」と謂ふ。解に「百果草木は皆甲宅す」、「皆」は讀みて「解」の如し、「解は坼を謂ふ、皮を呼びて甲と曰ふ、根を宅と曰ふ」と。困に「剝削」は當に「倪仇」に爲るべし」と。萃に「一握して笑を爲す」、「一握」は讀みて「夫三爲屋」の「屋」と爲す」と。繫辭に「道は天下を濟ふ」、「道」は當に「導」に作るべし。「天下の至賾を言ふ」、「賾」は當に「動」と爲すべし。說卦に「乾卦と爲す」、「乾」は當に「幹」と爲すべし、と。其の説鑿多し。鄭の學今傳ふること亡し、『釋文』及び『正義』に間ま之を見る。この条は長文に見えるが、その中身は『易經』の經文の文字の異同を示すものである。鄭玄の著名な注釈書の一つに『毛詩』鄭箋があるが、『易經』にも注釈をした。鄭玄の「易」学は王應麟の時代ではすでに滅び、『經典釋文』や『周易注疏』に見られる程度である。それを王應麟は丹念に集め、一々示した。このように文字の異同を密に確認することが王應麟にとって重要だったのである。漢唐に發達した訓詁学は、一字の意味を確定することを中心の一つとする学問である。『提要』にある「能知漢唐諸儒、本本原原、具有根底」が端的に表れる条であらう。

⑪『書』「序」、「八卦之說、謂之「八索」、求其義也。」而賈逵以爲「八王之法」、張平子以爲『周禮』「八議之刑」、索、空也。空設

之。唯馬融以爲八卦。杜預但云「古書名」、蓋孔安國『書』「序」猶未行也。愚按、『國語』史伯曰、「平八索以成人。」韋昭注「謂八體、以應八卦也。謂乾爲首、坤爲腹、震爲足、巽爲股、離爲目、兌爲口、坎爲耳、艮爲手。」此足以證孔・馬之說。

①『書』「序」に、「八卦の説、之を「八索」と謂ふ、其の義を求むるなり」と。而るに賈逵以て「八王の法」と爲す、張平子以て『周禮』の「八議の刑」と爲す、索は、空なり。之を空設す。唯だ馬融のみ以て八卦と爲す。杜預但だ云ふ「古書の名なり」と、蓋し孔安國の『書』「序」は猶ほ未だ行はれざるなり。愚按するに、『國語』に史伯曰はく、「八索を平らかにして以て人を成す」と。韋昭の注に「八體を謂ふ、以て八卦に應ずるなり。謂ふところは、乾を首と爲し、坤を腹と爲し、震を足と爲し、巽を股と爲し、離を目と爲し、兌を口と爲し、坎を耳と爲し、艮を手と爲す、と」。此れ以て孔・馬の説を證するに足る。

この条は『書經』の序文にある一文を多くの説を引用して検討する。『尚書』「序文」の「八索」と『易經』の「八卦」とは同様のものではないか、という議論が展開される。まず、「八索」を賈逵は「八王之法」と説明する。次に、張衡は『周禮』の「八議之刑」とする。さらに、馬融は孔安國と同じ「八卦」とし、杜預は「古書名」とした。<sup>九</sup>孔安國の「序」が世に通行するまではこのように学説がいくつかに分かれていた。それについて王應麟は『國語』「鄭語」の一節を引用し、韋昭の注を確認している。このように王應麟は孔安國及び馬融の注の典拠を確認した。「八索」についての多くの説を引用しつつ、根拠のある解釈を明確にした条と言えよう。

⑫『釋文』引『子夏傳』云、「地得水而柔、水得地而流。故曰比。」『周禮疏』謂、「坤爲土、坎爲水、水得土而流、土得水而柔。是水土和合。故象「先王建萬國、親諸侯。」

⑬『釋文』に『子夏傳』を引きて云ふ、「地は水を得て柔なり、水は地を得て流る。故に比と曰ふ」と。『周禮疏』に謂ふ、「坤を土と爲し、坎を水と爲す、水は土を得て流れ、土は水を得て柔なり。是れ水土の和合なり。故に象に「先王萬國を建て、諸侯に親しむ」と。」

この条は王と諸侯との関係を土と水との関係に譬えて述べた条であろう。『經典釋文』では『子夏易傳』を引用し、「比」卦を説明する。また『周禮』夏官「大司馬」の疏において、同様の一節が見られる。そして「比」卦象傳に「地上有水、比、先王以建萬國、親諸侯（地上に水有り、比なり、先王萬國を建つるを以て、諸侯と親しむ）」とある。自然界において土と水は重要な役割を持つことは言

うまでもない。一方が一方の力を借りてその特性を發揮する。どちらが欠けても成立しない様子が「水土和合」なのである。では、その比喩をもとに考えれば、王と諸侯はどのような関係であるべきか。その解答を、王應麟は『子夏易傳』及び『周禮』の疏によって解説したのである。

⑬王肅注『易』十卷、今不傳。其注「噬乾肺、得金矢」曰、「四體離陰卦、骨之象。骨在乾肉、肺之象。金矢所以獲野禽、故食之反得金矢。君子於味必思其毒、於利必備其難。」見『太平御覽』。

⑭王肅注『易』十卷、今傳はらず。其の「乾肺を噬して、金矢を得」に注して曰はく、「四體の陰卦に離るは、骨の象なり。骨の乾肉に在るは、肺の象。金矢は野禽を獲る所以なり、故に之を食ひて反つて金矢を得たり。君子の味ふに於て必ず其の毒を思ひ、利あるに於て必ず其の難に備ふ」と。『太平御覽』に見ゆ。

この条は、すでに佚した王肅の『易經』への注釈書についての言及である。「噬乾肺、得金矢」の一節は「噬嗑」卦九四爻の一節である。王肅が注した『周易』は『隋書』「經籍志」・『旧唐書』「經籍志」・『宋史』「藝文志」・『經典釋文』「叙録」にその名を見ることができるが、その著作は佚したようである。王應麟はその王肅の注釈の一部分を『太平御覽』の八百六十二巻に見ることができると言う。『提要』のいう王應麟の「博洽多聞」さが如実に現れていると言えよう。

⑮「坊記」曰、「不耕穫、不菑畲、凶。」『荀子』曰「括囊无咎无譽、腐儒之謂也。」『左氏傳』穆姜以「元・亨・利・貞」爲隨之四徳。爲是說者、其未見彖・象・文言歟。

⑯「坊記」に曰はく、「耕穫せず、菑畲せず、凶なり。」『荀子』に曰はく「括囊して咎无く譽无し、腐儒の謂なり」と。『左氏傳』に穆姜「元・亨・利・貞」を以て隨の四徳と爲す。是の説を爲す者は、其れ未だ彖・象・文言を見ざるか。

この条は『禮記』「坊記」・『荀子』「非相篇」・『春秋左氏傳』「襄公九年」傳の三ヶ所に『易經』の一節が見られることを示す。それらを提示した後、王應麟は一言付け加える。この王應麟の一言は重要な発言ではないかと考える。今まで確認で終えていたことが多かったが、疑問を提出したのである。ただ、重要なのは解答を得ることではないであろう。『禮記』・『荀子』・『春秋左氏傳』において、『易經』の一節を引用して自説を展開する彼らは、『易經』の「彖傳」・「象傳」・「文言」を見ていないのでないか、という意味であると考

えられよう。ただ、現存する『易經』は長い時間をかけ、かつ複数の人物の手によって整理されたことは周知の事実である。しかし、『禮記』・『荀子』・『春秋左氏傳』が整理された頃に『易經』もすでに現在の形に整理されていたか否かを判断することは不可能であろう。少なくとも王應麟は先の三書が整理された頃には『易經』もある程度は整理がなされていたと考えたようである。

⑮繫辭正義云「韓氏親受業於王弼、承王弼之旨、故引弼云以證成其義。」愚考、王弼終於魏正始十年、韓康伯東晉簡文帝引爲談客。二人不同時、相去甚遠、謂之「親受業」、誤矣。

⑯繫辭の正義に云ふ「韓氏親ら業を王弼に受け、王弼の旨を承け、故に弼云ふを引き以て其の義を證成す」と。愚考ふるに、王弼は魏の正始十年に終ふ、韓康伯は東晉の簡文帝引きて談客と爲す。二人時を同じくせず、相去ること甚だ遠し、之を「親ら業を受く」と謂ふは、誤りならん。

この条は『易經』「繫辭上」の「疏」についての条である。「繫辭上」の本文に「大衍之數五十、其用四十有九。(大衍の數五十、其の用四十有九。）」とあり、疏に同文がある。この疏について王應麟は言及する。王弼は三國魏の正始十年に没したとされる。しかし、その王弼に業を受けたとされる韓康伯は東晉の人である。この二人は同時代の人ではないため、直接会うことは不可能である。王弼の學問が誰かを經由して韓康伯に繼承されたならば、「親」と言わないはずである。それを「親受業」としたのは誤りである、と王應麟は言及する。このように王應麟は正史を用いて歴史的事実の確認と修正を行ったことが分かる。注疏に引かれる人物関係について、王應麟はいつの時代の人かということ、正史を用いて確認する。

⑰『漢書』「叙傳」六世眈眈、其欲洩洩、〔音滌。〕注、「頤六四爻辭。洩洩、欲利之貌。今『易』作「逐逐」。『子夏傳』作「攸攸」。顏注以「洩洩」爲欲利、輔嗣以「逐逐」爲尚實、其義不同。

⑱『漢書』の「叙傳」に「六世眈眈たり、其の欲洩洩たり」と、〔音は滌。〕注に、「頤の六四の爻辭なり。洩洩は、利を欲するの貌。今の『易』は「逐逐」に作る」と。『子夏傳』に「攸攸」に作る。顏の注に「洩洩」を以て利を欲すと爲す、輔嗣「逐逐」を以て實を尚ぶと爲す、其の義同じからず。

この条は『漢書』「叙傳下」の一節の文字の異同と、それによる訓詁の変化を述べる。顏師古の注によれば、「六世眈眈、其欲洩洩」

は『易經』「頤」卦六四爻の一句であり、利益を欲する様子である。そして、現在の『易經』では「逐逐」に作る、という。顔師古はこのように解釈したが、『周易』王弼注では「逐逐は敦實を尚ぶなり。」とある。つまり、顔師古の注と王弼の注で解釈に齟齬がある。故に王應麟は「其義不同」とした。ここで注意すべきことがある。それは、顔師古と王弼との解釈のどちらが正しいかということに言及しないことである。解釈の違いを指摘するに留まり、確実な証拠がない場合は判断を控えるといった王應麟の立場が伺える条であると言えよう。

⑰ 『館閣書目』、『周易元包』十卷、唐衛元嵩撰。」今按楊楫「序」云、「元嵩、益州成都人。明陰陽曆算、獻策後周、賜爵持節蜀郡公。武帝尊禮、不敢臣之。」『北史』「藝術傳」、「蜀郡衛元嵩、好言將來事、不信釋教、嘗上疏極論之。」『書目』以爲唐人、誤矣。

⑱ 『館閣書目』に、「『周易元包』十卷、唐の衛元嵩の撰」と。今按するに楊楫の「序」に云ふ、「元嵩は、益州成都の人。陰陽曆算に明らかにして、策を後周に獻じ、爵を賜はりて持節蜀郡公たり。武帝禮を尊び、敢て之を臣とせず」と。『北史』「藝術傳」に、「蜀郡の衛元嵩、好みて將來の事を言ふ、釋教を信せず、嘗て上疏して之を極論す」と。『書目』に以て唐の人と爲すは、誤れり。

この条は『中興館閣書目』の撰者についての言及である。王應麟は『周易元包』の「序文」を引用して確認する。さらに『北史』を引用して「衛元嵩」の名前とその人物の様子が書かれた箇所を示した。序文を見ても、『北史』を見ても、「唐」の人であるとは書かれていない。『中興館閣書目』が何を見て「唐」としたかは不明だが、王應麟は『中興館閣書目』の表記は誤りであると指摘する。このように目録まで幅広く確認をしていたと言えよう。

この章では、王應麟は漢代及び唐代の『易經』の議論を確認した。ここまでで見られた王應麟の学術の特徴は何か。それは、文字の異同を丹念に示した条があり、「八索」と「八卦」の関係が見られた。そのような語句や伝承について、王應麟は多様な書物を引用する。その他でも引用された書物は、『經典釋文』・『周禮』・『禮記』・『春秋左氏傳』といった経書をはじめとして、『漢書』・『國語』・『北史』といった歴史書、『荀子』・『太平御覽』・『中興館閣書目』といった諸子・類書・目録書である。このように王應麟は幅広い引用によって確認をしたことが理解できよう。

## 四、宋代の注釈に関して

ここから、宋代において、どのような議論がなされたのか、そして、王應麟はどのような解釈を行ったのかを確認していく。

⑱張子曰、「易爲君子謀、不爲小人謀。」朱子謂、「聖人作易、示人以吉凶。言利貞、不言利不貞。言貞吉、不言不貞吉。言利禦寇、不言利爲寇也。」

⑲張子曰はく、「易は君子の爲めに謀る、小人の爲めに謀らず」と。朱子謂ふ、「聖人易を作り、人に示すに吉凶を以てす。貞に利しと言ひて、不貞に利しと言はず。貞にして吉と言ひて、不貞にして吉と言はず。寇を禦ぐに利しと言ひて、寇を爲すに利しと言はざるなり」と。

こここの「張子」とは張載のことであり、この一節は『正義』「大易篇第十四」に見られる。また、朱子の一節は『朱子語類』卷六十六に見られる。どちらも『易經』の一端を解説したものである。『易經』全体を解説することは困難である、ということは想像に難くない。しかし、その一端を説明するといった解説は、多くの学説が残されている。張子と朱子の一節はその一つであると考えられる。王應麟はこの二人の説を引用することによって、『易經』とは何かを説明しようとしたのではないかと考える。

⑲『易』「正義」云、「伏犧制卦、文王繫辭、孔子作十翼。」朱子謂「繫辭本文王・周公所作之辭、繫于卦爻之下者。上繫・下繫乃孔子所述繫辭之傳也。」彖、即文王所繫之辭。象者、卦之上下兩象及兩象之六爻、周公所繫之辭也。彖・象・上下傳者、孔子釋經之辭也。愚按、『釋文』云、「王肅本作繫辭上傳、訖於雜卦、皆有「傳」字。」「本義」從之。『漢』「儒林傳」云、「孔子晚而好易、讀之韋編三絶、而爲之傳。」王肅本是也。

⑲『易』の「正義」に云ふ、「伏犧卦を制し、文王辭を繋げ、孔子十翼を作る」と。朱子謂へらく「繫辭は本文王・周公の作る所の辭なり、卦爻の下に繋ぐる者なり。上繫・下繫は乃ち孔子の述ぶる所の繫辭の傳なり」と。象は、即ち文王の繋ぐる所の辭なり。象は、卦の上下兩象及び兩象の六爻にして、周公の繋ぐる所の辭なり。彖・象・上下の傳は、孔子の經を釋くの辭なり。愚按ずるに、『釋文』に云ふ、「王肅本と繫辭上傳を作りて、雜卦に訖はるまで、皆「傳」の字有り」と。『本義』之に従ふ。『漢』「儒

林傳」に云ふ、「孔子晩にして易を好み、之を讀みて韋編三絶す、而して之が傳を爲る」と。王肅是に本づくなり。

この条は「卦辭」・「爻辭」は誰の手によるものか、という議論である。「周易」「正義」によれば、伏犧・文王・孔子の三人とする。それに対し、朱子は『周易本義』卷二にて文王・周公・孔子の三人とした。王應麟は『易經』の作者は朱子の説に拠っていると考えられる。この条の後半において、まず、朱子の『周易本義』が拠り所とした『經典釋文』を引用した。その後、『漢書』「儒林傳」を引用し、『經典釋文』中の王肅の説の拠り所を確認する。「周易本義」の出典を確認するに留まらず、さらにその出典に遡ることで、『周易本義』の説を確認した。換言すれば、『周易本義』は『漢書』「儒林傳」を下地にすることを確認したのである。朱子の説は孔穎達の「正義」ではなく、『漢書』「儒林傳」を典拠としたことを明らかにしたのである。

⑳程子言易、謂「得其義、則象數在其中」、朱子以爲「先見象數、方說得理、不然事無實證、則虛理易差。」愚嘗觀顏延之庭誥云、「馬・陸得其象數、取之於物。荀・王舉其正宗、得之於心。」其說以荀・王爲長。李泰發亦謂「一行明數而不知其義、管輅明象而不通其理、蓋自輔嗣之學行、而象數之說隱。然義理・象數、一以貫之、乃爲盡善。」故李鼎祚獨宗康成之學、朱子發兼取程・邵之說。

⑳程子『易』を言ひて、謂へらく「其の義を得れば、則ち象數其の中に在り」と、朱子以爲へらく「先づ象數を見、方に得理を説き、然らざれば事實證無きは、則ち虚理差ひ易し」と。愚嘗て顏延之「庭誥」に、「馬・陸其の象數を得て、之を物に取る。荀・王其の正宗を舉げて、之を心に得たり」と云ふを觀る。其の説荀・王を以て長と爲す。李泰發も亦謂へらく「一行は數を明らかにして其の義を知らず、管輅は象を明らかにして其の理に通せず、蓋し輔嗣の學行はれて自り、而して象數の説隱る。然して義理・象數、一以て之を貫く、乃ち善を盡すと爲す」と。故に李鼎祚獨り康成の學を宗とし、朱子發程・邵の説を兼ね取る。

この条は『易經』をどのように解釈するかを問題にした際に、その方法は二つに分かれることを言及する。その二つをここでは便宜的に「象數派」と「義理派」と呼称しておく。程伊川が言うには、『易經』において重要なのは、「得其義」ことであるという。つまり、程伊川は「義理派」であろう。また、朱子が言うには、「見象數」ことであるという。つまり朱子は「象數派」であろう。そのように纏めたいので、王應麟は顏延之の「庭誥」という作品を引用した。顏延之の「庭誥」は『宋書』にその作品があるが、王應麟が示した一節はない。ただし、『太平御覽』卷六百八に「馬・陸得其象數而失其成理、荀・王舉其正宗而略其象數。」（馬・陸は其の象數を得て其



の成理を失ひ、荀・王は其の正宗を擧げて其の象數を略す。」と類似した一節がある。また李泰發も一行は「數」には明るいが「義」は分かつていない、管輅は「象」には明るいが「理」は分かつていない、とする。このように「象數派」か「義理派」かに分かれてしまうが、結局は「盡善」に行き着くと李泰發は言う。また、李鼎祚は鄭玄の學問に沿い、朱子發は程伊川と邵雍の説を採用した。誰がどの系統に属するかを王應麟は整理したのである。<sup>三三</sup>

②①歐陽公以『河圖』・『洛書』爲怪妄。東坡云、「著於『易』、見於『論語』、不可誣也。」南豐云、「以非所習見、則果於以爲不然、是以天地萬物之變爲可盡於耳目之所及、亦可謂過矣。」蘇・曾皆歐陽公門人、而論議不苟同如此。

②②歐陽公『河圖』・『洛書』を以て怪妄と爲す。東坡云ふ、「『易』に著はれ、『論語』に見ゆれば、誣ふべからざるなり」と。南豐云ふ、「習見する所に非ざるを以てすれば、則ち以て然らずと爲すを果たす、是れ天地萬物の變を以て耳目の及ぶ所を盡すべしと爲す、亦過れりと謂ふべし」と。蘇・曾皆歐陽公の門人なるも、而れども論議苟同せざること此くの如し。

この条は歐陽脩・蘇軾・曾鞏の三人を列挙し、その三人が『河圖』・『洛書』に対して議論した。<sup>三三</sup>『易經』は經書の一つではあるが、占いの書でもある。故に神秘性を持たざるを得ない。その特性をもつ書物の最たるもの一つとして『河圖』・『洛書』が挙げられよう。歐陽脩は『河圖』・『洛書』を「怪妄」と否定的にみなした。その様相は「廖氏文集序」に「秦遂焚書、六經於是中絶。漢興蓋久而後出、其散亂磨滅、既失其傳。然後諸儒因得措其異說於其間。如『河圖』・『洛書』、怪妄之尤甚者。（秦遂に焚書し、六經是に於て中絶せり。漢の興りて蓋し久しくして後に出で、其れ散亂磨滅し、既に其の傳を失へり。然る後に諸儒因りて其の異說を其の間に措じふを得。『河圖』・『洛書』の如きは、怪妄の尤も甚しき者なり。）」とある。これに対し、蘇軾は『東坡易傳』で、曾鞏は『洪範傳』の中で「不可誣也」、「亦可謂過矣」と言い、歐陽脩と同様の立場をとらない。<sup>三四</sup>王應麟は、蘇軾と曾鞏は歐陽脩の「門人」だが、その議論はこのように異なると言及する。同門であるために同様の考え方をするとは限らない。また、王應麟はこの三者の説について、自説を述べない。王應麟自身がこれらについてどう考えたかを書かずに終えることは、彼の記述のスタイルの一つではないかと考えられる。

②②「高宗伐鬼方」、「後漢」「西羌傳」「武丁征西羌鬼方、三年乃克。」「竹書紀年」「武丁三十五年、周王季伐西落鬼戎、然則鬼方即鬼戎與。」「詩」「殷武」「奮伐荆楚」、朱子『集傳』云、「『易』曰『高宗伐鬼方、三年克之』、蓋謂此。」愚按、「大戴禮」「帝繫篇」「陸

終氏娶於鬼方氏」、「楚世家」「陸終生子六人、六曰季連、半姓、楚其後也」、可以證『集傳』之說。

②② 「高宗 鬼方を伐つ」、「後漢」「西羌傳」に「武丁 西羌鬼方を征つ、三年にして乃ち克つ」と。『竹書紀年』に「武丁三十五年、周王季 西落鬼戎を伐つ」と、然らば則ち鬼方は即ち鬼戎なるか。『詩』の「殷武」に「荆楚を奮ひ伐つ」と、朱子『集傳』に云ふ、「『易』に曰はく「高宗 鬼方を伐つ、三年にして之に克つ」と、蓋し此を謂ふならん」と。愚按ずるに、『大戴禮』「帝繫篇」に「陸終氏 鬼方氏を娶る」と、「楚世家」に「陸終子六人を生み、六に曰はく季連、半姓、楚は其の後なり」と、以て『集傳』の説を證すべし。

この条は「高宗伐鬼方」についての議論である。まず『後漢書』と『竹書紀年』を引用する。そのうえで王應麟は「鬼方」は「鬼戎」でないかと述べる。その後、『詩經』商頌「殷武」を引用し、『詩集傳』の注釈を引用する。ここに引用される『易經』の一節は「既濟」卦九三爻に見られる。さらに王應麟は『大戴禮』及び『史記』を引用する。この二書が、『詩集傳』の注釈の根拠であるという。なぜ王應麟はここで『易經』の一節を示しながら『詩集傳』を利用したか。王應麟がここで問題としている語は「鬼方」である。その語がある『易經』の一節が、朱子によって『詩集傳』の注釈として使用された。その『詩集傳』の注釈は『大戴禮』と『史記』とを根拠とする。つまり、『後漢書』・『竹書紀年』・『詩經』・『大戴禮』・『史記』の中に「鬼方」という語が変化して見られるということを示したのである。そしてそれは、語は違っても『易經』の一節が諸所に見られることを言及するためではないかと考える。

ここまでで、宋代における議論と、それに対する王應麟の言及を確認した。その中には、張載や朱子の『易經』解説の引用がなされた。また、『易經』を解釈する際に「義理派」と「象數派」に分かれ、漢代から宋代における著名な人物たちがどちらに分類されるかを整理して明確にした。また、歐陽脩・蘇軾・曾鞏を挙げて『河圖』・『洛書』についての言及を取り上げ、彼らの立場を確認した。そして『易經』に見られる一節を『後漢書』・『竹書紀年』・『詩經』・『大戴禮』・『史記』を引用して議論を展開した。この章においても王應麟は幅広く人物の議論や書物を引用していることが理解できよう。

## 五、「易緯」とその言及に関して

「経書」には、対になる「緯書」と呼ばれる書物がある。<sup>五</sup>王應麟は『易經』本文や、その注釈、そして各時代の議論のみならず、「緯書」にも視野を拡大していたようである。その様相をここから確認していく。

②③『左傳』疏引『易』云、「伏羲作十言之教、曰乾・坤・震・巽・坎・離・艮・兌・消息。」朱子發以爲鄭康成之語。愚謂「正其本而萬物理、失之豪釐、差以千里。」見於『易緯通卦驗』。漢儒皆謂之『易』、則此所謂『易』云者、蓋緯書也。

②③『左傳』の疏に『易』を引きて云ふ、「伏羲十言の教を作る、曰はく乾・坤・震・巽・坎・離・艮・兌・消息」と。朱子發以て鄭康成の語と爲す。愚謂へらく「其の本を正して萬物理まる、之を豪釐に失へば、差ふに千里を以てす」と。『易緯通卦驗』に見ゆ。漢儒皆之を易と謂ふ、則ち此れ所謂『易』と云ふは、蓋し緯書ならん。

ここに引かれる『左傳』は『春秋左氏傳』定公四年の正義の一節である。ただし、『春秋左氏傳』に引かれる「易」の一節は現行の『易經』には見られない。「愚謂「云々」の一節は、僅かに変化があるが、同様と考えられる一節が見られる。<sup>六</sup>王應麟がいうには、漢代の儒者のいう「易」は『易經』のみを指すのではなく、「緯書」をも指すと述べる。漢代においては『易經』だけでなく「易緯」もまた一般に流通していたと考えられよう。王應麟は経書としての「易」のみならず緯書としての「易」にも視野を広げていたと言えよう。

②④『鹽鐵論』文學引『易』曰、「小人處盛位、雖高必崩。不盈其道、不恒其德、而能以善終身、未之有也。是以初登于天、後入于地。」『說文』引『易』曰、「地可觀者、莫可觀於木。」今『易』無之。疑『易傳』及易緯。

②④『鹽鐵論』の文學に『易』を引きて曰はく、「小人の盛位に處れば、高しと雖も必ず崩る。其の道を盈さず、其の徳を恒にせず、而して能く善を以て身を終ふるは、未だ之れ有らざるなり。是を以て初めは天に登り、後には地に入る」と。『說文』に『易』を引きて曰はく、「地の觀るべきは、木より觀るべきは莫し」と。今の『易』に之無し。疑ふらくは『易傳』及び易緯ならん。

この条は『鹽鐵論』及び『說文解字』が引用する『易經』の一節に対する言及である。『鹽鐵論』「遵道第二十三」にこの一節は引かれる。また、『說文解字』「目部」の「相」という文字の説明のためにこの一節は引用される。二書が引用した一節は、すでに佚した『子

夏易傳』または「易緯」中の言葉か、と王應麟は述べる。現存の『易經』にこれらの一節が無いと言って終わらず、『子夏易傳』・「易緯」のどちらかの一節ではないか、と言及する。

「易」と聞けば多くの人が『易經』を思い浮かべよう。王應麟は『易經』のみならず、「易緯」にまで言及した。引用した「易緯」とされる書物は多くが佚書となっていて、直接手にすることは困難である。『春秋左氏傳』に見られる『易緯通卦驗』といった書物もあれば、『鹽鐵論』や『説文解字』のように、引用にのみ残存する「易緯」の文章もある。王應麟はそれらに対しても言及したのである。これもまた、引用の幅が十分に広いと言えよう。

## 六、小結

本稿では王應麟が『困學紀聞』において、『易經』にどのような議論をし、その特徴を検討した。

まず、『提要』や何焯にあるように、十分な価値が認められているが、先行研究は少ない。そのため、『困學紀聞』を取り上げて検討することは、意味のないことではないであろう。

第一に『易經』の本文について検討した。まず「乾」・「坤」を中心に言及し、その他の卦にも言及した。また、中には解説するような条も見られた。特に、「乾」・「坤」を重視して言及することは、『易經』について言及することに繋がると考えられる。『易經』の短一節をどう捉えるか。そしていくつかの異なる卦に見られる同じ一句をどう捉えるか。王應麟はそこに注目していたと考えられる。第二に、漢代及び唐代の『易經』の注釈における議論を確認した。まず、文字の異同を丹念に示した条があり、語句の関係等について、王應麟は多様な書物を引用する。そこでの引用された書物は経書、歴史書や類書である。このように王應麟は幅広い引用によって確認をしたことが理解できよう。

第三に、宋代における議論と、それに対する王應麟の言及を確認した。そこには『易經』解説の引用、『易經』を解釈する際の「義理派」・「象數派」の分類と整理をした。また、『河圖』・『洛書』についての言及を確認した。そして『易經』に見られる一節を多様な

書物を引用して議論を展開した。ここでも王應麟は幅広く人物の議論や書物を引用していることが理解できよう。

第四に、王應麟は『易經』の他に「易緯」にも言及する。「易緯」は現存するものは少なく、ほとんどが引用に頼ることとなる。しかし、王應麟の「易」に対する視野の幅広さを確認した。

本稿では『困學紀聞』の『易經』を中心に考察した。このように王應麟の引用した書物は幅が広いが、この引用の背景には何が考えられるか、この点は重要な課題であろう。また、王應麟の学術体系の様相を考察するうえで、他の「經書」も検討する必要がある。『困學紀聞』の目次の順序に沿い、次は『書經』を中心に考察を進めたい。

(一九九六五文字)

一 何焯、清、長洲の人。字は配瞻。號は茶仙。校訂の学に長じ、代表的な著書に『義門讀書記』がある。

二 王應麟著作集成『困學紀聞注』第二冊、一五〇頁。洪容齋は、宋の洪邁のこと。鄱陽の人。字は景虛。辯證考據が精確であり、代表的著作に『容齋隨筆』がある。ここで洪邁と王應麟を並列するのは、『容齋隨筆』と『困學紀聞』を指すと考えられる。

三 詩經学に関する、黄忠慎氏の「王應麟三家《詩》學探析」(『文與哲』二〇一五年六月・第二六期・國立中山大學中國文學系・台灣)がある。王應麟の『詩考』を用いて「三家詩」について考察する。

四 『國學院中國學會報』第六十二輯、拙著「王應麟『困學紀聞』における「四書」解釈について」の中で王應麟と『困學紀聞』の簡易な紹介をした。

五 『三國志』「管寧傳」注に「寧謂原曰、「潜龍以不見成德、言非其時、皆招禍之道也。」(寧原に謂ひて曰はく、「潜龍は見ざるを以て徳を成す、其の時に非ざるを言へば、皆禍の道を招くなり」と。)とある。

六 『三國志』「杜襲傳」に、「襲避亂荊州、劉表待以賓禮。同郡繁欽數見奇於表、襲喻之曰、云々。(襲亂を荊州に避け、劉表待つに賓禮を以てす。同郡の繁欽數、奇を表に見て、襲之を喻して曰はく、云々。)とある。

七 干寶、字は令升、新蔡の人。『晉書』に列伝がある。『經義考』によると「干寶『周易注』、『隋志』十卷、佚、今止存一卷。(干寶『周易注』、『隋志』に十卷と、佚なり、今止めて一卷を存す。)とある。

八 多くの文字の異同がされたが、これで全てではない。王元圻や晁公武によってさらに追加される。

九 賈逵・張衡・馬融はそれぞれ『後漢書』に列伝がある。また、杜預は『晉書』に列伝がある。この条の後半の「韋昭」は『三国志』に列伝がある。

一〇 『太平御覧』は宋代に編纂された類書の一つだが、王肅注についての議論であるため、この章に入れた。

一一 韓康伯、名は伯、潁川長社の人、『晉書』「列伝第四十五」に伝記がある。

一二 馬は馬融、王は王績、荀は荀爽、王は王弼のことである。李泰發、名は光、上虞の人、諡は莊簡、『宋史』に列伝がある。一行は唐代の僧侶で、『旧唐書』「曆志」・「天文志」にその学説がみられる。管輅、字は公明、平原の人。『三国志』に列伝がある。

一三 『漢書』「五行志」に「天垂象見吉凶、聖人象之。河出圖雒出書、聖人則之。（天は象を垂れて吉凶を見はし、聖人之を象る。河は圖を出だし雒は書を出だし、聖人之に則る。）」とあり、これが「河圖」・「洛書」とされる。「河」も「雒」も川の名とされ、そこから出現した不思議な図と文字が書かれた書物とされる。

一四 『論語注疏』卷九「子罕第九」に「子曰、「鳳鳥不至、河不出圖、吾已矣夫。」（子曰はく、「鳳鳥至らず、河圖を出ださず、吾已んぬるかな。」）とある。

一五 緯書については、中国古典新書『緯書』・安井香山著・明德出版社に詳しい解説がある。また、「緯書」におけるテキストは、中国思想史資料叢刊『七緯』・清趙在翰輯・中華書局がある。

一六 『困學紀聞注』の「元圻案」の注によると、『大戴禮記』・『史記』・『說苑』・『漢書』等に見られる。また、同じ「正其本云々」の一節は『文選』卷六〇「齊竟陵文宣王行狀」にあり、その李善注は『易緯乾鑿度』という緯書から引用する。

